最近のガザはどうなっているか

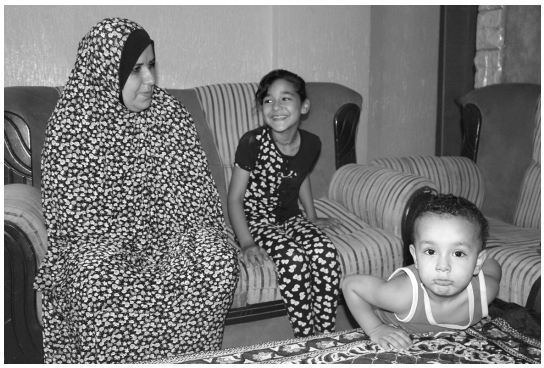
米国による大使館のエルサレム移転とUNRWA（国連パレスチナ難民救済事業機関）拠出金の停止などは、
パレスチナ人の生活を大きく脅かしています。
最近のガザの様子と生活について、当会現地職員のアリとガディールが報告します。

生活や学校への打撃

日本の皆さんがガザの状況を心配してくださっていることに感謝します。UNRWA の財政難が大きく報じられましたが、影響は大変に大きいからです。

ガザの人口の7割は難民ですから、食糧支援に多くの人が頼っているし、難民の人たちがこれまで受けていた医療支援も減らされています。NGO の活動を支援してきた米国の資金も凍結されています。そのため、ガザだけでも20数団体が活動を休止し、職員を解雇しています。支援を必要とする人たちにドアが閉ざされたのです。

14年の戦争で負傷しリハビリを続けている少女のお母さんは、「いままでは少しは栄養があるものを食べさせられたが、最近は肉や魚などのタンパク質を買うことができない」といっています。この家族も収入がなく、毎週70シェケル（1シェケル約35円）の支援金をもらっていますが、それだけでは大家族を食べさせることは難しいのです（ガザのレストランで食事をすれば1人30シェケルはかかります）。栄養支援をしてきた地元 NGO のほとんども活動を止めてしまっています。栄養支援事業のため、これから調査を予定していますが、多くの子どもたちの体重が減っていると予想しています。そのうえ、今年末には UNRWA が食糧支援を終了するとも言われています。



頭部を負傷し神経損傷をしたリマスは今では歩いて学校に通えるようになった。髪の毛も伸びて満足している。お母さんは食糧支援の打ち切りをとても心配している。

最近まで UNRWA は教育の質を高めようと、双方向授業や心理サポートに力を入れてきましたが、そういう余裕はなくなりました。ガザでは人口が増えているので、生徒が毎年増えますが、教員数が減らされました。その結果、これまで30数人だった1クラスの人数が、小1から小4までは42人、小5から中3は48人になりました。当然ながら教員は全ての子どもに目が届かず、子どもの学力低下が心配されています。生活に追われる親たちは子どもの勉強を見る余裕はありません。また UNRWA がこれまで支給してきた通学カバンや文房具などもなくなりました。

地域によっては、学校がこれまでの二部制から三部制になりました。第1部は朝6時半に開始し10時半まで、第2部は9時半から12時半、第3部は13時から16時半です。子どもたちの負担、教員の負担が想像できます。

腕を負傷し麻痺が残ったラニアはチューブを使ったリハビリ中。家は外国からの資金援助で再建されたものの、途中で資金が足りず、窓ガラスなどが入っていない。しかも家が遠くなって学校には片道1時間かけて歩いて通っている。家計が苦しくバス代が出ないためだ。

職員削減や給与のカット

話は少しさかのぼります。2017年3月にパレスチナ自治政府（PA 政府、ヨルダン川西岸）がガザに住む PA 政府時代からの公務員の給与を30%カットしました。それが今年になって再度カットして現在は以前の半額です。一方、ハマス政府の雇った公務員の給与も額面の4割しか払われていません。そして追い討ちをかけるように、今回の UNRWA の財政難による職員の給与カット（職種によるが半額程度）と解雇があったわけです。UNRWA では、緊急支援の要員、心理サポート関係、職業訓練関係の職員を解雇したり、パートタイムに変えたりしました。約1,000人を解雇したと聞いていますし、今後も400人が解雇されるといわれています。UNRWA 職員はガザ全体で15,000人、公務員は合計10万人で、ガザの働く人のかなりの割合を占めているので、その影響は甚大です。

民間企業でも従業員の給与カットを始めています。店舗を閉じたり、従業員を解雇したり、フルタイムからパートに変えたりしているのです。ガザの商品はほとんどがイスラエルやヨルダン川西岸、他の諸国からの輸入品ですが、その搬入量も大幅に減っています。2016年には1日に800台のトラックが物資を運んでいましたが、今では350台に減っ

ています。ほとんどの人が携帯電話を持っているため、ガザで最も安定している職場といわれた携帯電話会社さえも、この状況で職員の削減をしています。

働く人の多くが銀行のローンを抱えているので、振り込まれた給与からその分が差し引かれるのは言うまでもありません。銀行預金は底をつき、ローンを踏み倒した人たちが警察に追われる状態が生まれています。ガザ全体がブラックアウトになっている感じです。経済的というより政治的な危機です。

友人の心理専門家は公務員でしたが、UNRWA に今年1月転職することになっていました。契約がどんどん遅れ、最近ようやく学校カウンセラーとして働き出したものの給与は予定の半額になりました。「生活の不安で自分自身にカウンセリングが必要だと感じています。こんな自分がどうやって子どもたちを支えられるのだろうか」と心配しています。

社会的な不安

不渡り小切手が非常に増え、店は小切手による支払いを受け付けなくなりました。現金でしか物が買えません。物価は上がっています。以前は100ドルあれば大家族の食品も潤沢に買えましたが、いまでは量が足りません。質が悪いため安かったエジプト製ガソリンはイスラエル製品と同じ価格になってしまいました。地元で取れる野菜でさえ、30シェケルあれば冷蔵庫がいっぱいになったのが、昨日はりんごとバナナしか買えませんでした。

電気は4時間しか来ません。16時間停電で、また4時間というサイクルです。下水処理場は稼動できず、ガザ市は海岸での遊泳を禁止しました。水道は貯水タンクに上げるために電気がないと使えません。電気が来たときに全ての家事をする必要があります。自家発電機があっても、燃料が高騰しています。

どの家庭でも失業した人がいます。もし稼ぎ手が一人しかいなければ、大変なことになっているのです。給与がある人たちは、自分の小家族だけでなく、親戚や友人や知り合いを支える必要があります。誰にとっても非常に厳しい状況です。就職できたからと、結婚したり子どもができた若い人たちはどんな思いをしているでしょう。

2日前、アブ・イスカンダルというパン屋が1人の求人をSNSで出したところ、3000人以上が応募して来ました。修士とか博士とか、技術者とかがたくさんいたそうです。

海外に出てしまう人たち

エジプト国境のラファを通って、トルコに行こうとする若者が急増しています。トルコは入国ビザを取るのがヨーロッパなどに比べて簡単で、しかもビザ代も安いのです。ラファ国境は閉まったり開いたりしていますので、何日か検問所の土間で寝る覚悟があれば、時間はかかるもののいつかは出国できるからです。家や土地を売って出国する人たちも増えています。先行きの展望は全くなくても、ガザにいるよりはマシと思っているからです。

プロパンガスと毛布、LEDランタンを受け取りにきた32歳の女性。夫を亡くし、障がいのある子など4人の子どもを育てている。戦争後、心理ストレスで息子の一人は言葉を話さなくなった。収入は数か月ごとに支給されるわずかな支援金だけ。停電になると灯すロウソクで、子どもたちが火傷したり火事を起こさないか心配だという。

イスラエル国境付近での抗議行動も続いています。以前は金曜日だけだったのが、火曜日水曜日金曜日にも抗議行動が組織されています。東部だけでなく北部や海沿いの地域でもデモが行われています。人々の不満をそらすことに利用されなければと思います。

もちろんガザの危機状態は、イスラエルの封鎖によるところが大きいのですが、ハマスとファタハの責任も大きいのです。17年秋にはファタハとハマスは和解すると決めたはずなのに、今に至るまで何も進展していません。人々は双方のリーダーたちに大きな不満と不信を感じています。給与をカットしただけで何も解決していない。みな自分の権力を維持したいだけなのだ。市民が犠牲を払っているのに、あの人たちは良い生活をしていると。

CCP は今年も乳がん支援を継続し、10月は乳がん月間のイベントを実施しています。でも、乳がん患者でガザの外でしか治療ができない人たちの出域許可はほとんど出ません。理由ははっきりしないものの、イスラエルはガザの出入りを非常に制限し始めています。そのため、再び戦争が起こるのではと多くの人が心配しています。また昨年来、乳がん患者が使うホルモン剤がガザに入ってこなくなっています。その背景に PA 政府とハマス政府の対立が原因にあります。ガザに入る薬品については PA 保健省が全て管理していて、理由は分かりませんが、PA 政府が薬品のガザ搬送を止めているのです。パレスチナの団体はそうした状況に当惑し、なかなか発言しにくい状況なのです。

こうした状況の中で、パレスチナ子どものキャンペーンが活動を継続していることに、ガザ住民として、とても感謝しています。また日本政府がヨーロッパとともに、UNRWA への緊急支援を表明したことにも敬意を表します。

〈事務局からのお願い〉 最近、複数の方から「フェイスブックなどでつながったガザの人たちから、お金の無心をされているが、どうすればよいか」という趣旨のご連絡をいただきました。もちろん、それぞれの方の判断にお任せすることではありますが、当会としては個人的な支援はお勧めいたしません。もし支援される場合でも、本当にガザの人か、本当に困っているのかなど、身元と生活状況を十分確認してください。また、一度支援をしたら、悪質な催促が続く場合があることも予期しておかれるようにと、アドバイスいたします。

支援がますます減少しているレバノンでは…

レバノンでもUNRWAの予算削減は大きな影響を与えています。
すでに2年前からUNRWAのパレスチナ難民への支援は減らされていて、今年はパレスチナ人シリア難民への燃料支援もなくなると噂されています。

パレスチナ人シリア難民の状況

シリア内戦開始から7年あまり。シリアの隣国レバノンでは、今なお100万人を超える人々が難民として避難生活を送っています。その中には、「二重難民」「再難民」となったパレスチナ人シリア難民（PRS）がいます。

その98%は、国連パレスチナ難民救済機関（UNRWA）からの支援に頼って生活していますが、今年は米国の資金拠出停止の影響で、学校の統廃合や医療・保健サービスの削減が起こっています。冬場の越冬支援についても減額や停止が予想され、今後ますます生活が厳しくなることが心配されています。

山間部にあるワーベル難民キャンプと周辺に住むそうした女性たちに話を聞きました。

「レバノンはシリアと比べて物価は高い。食事は毎日最低限のパンでやりくりしている」「仕事がない。働けたとしても、まともに賃金を払ってもらえない。雇用主に言いたいけれど、怖くて言えない」「今日、明日の食事を摂るのに精一杯なのに、毎年数百ドルもかかる滞在許可を支払うことなんてできない」と、レバノンでの生活の厳しさを口々に語ります。

ヨーロッパなど第三国への移住も近年は難しい状況で、昨年あたりから、シリアでは国内避難民を中心に、帰還が進んでいるそうです。しかし、絶対的な食料や物資、医療、教育の不足、依然として不安定な治安、政治的な理由などから、シリアへ帰還できずにいる難民がほとんどです。シリアで最大のヤルムーク難民キャンプから避難してきたダリネさんは、「内戦でヤルムークキャンプは全部壊されました。家も何もかもです。瓦礫の山で、電気も水道も通っていない。帰りたくても帰ることができない」と言います。別の女性は、兄が撮影したという現在のヤルムークキャンプの映像を当会現地職員に見せてくれました。「兄はキャンプの中へ入ったときに、あまりの悲惨さに言葉を失ったそうです。私もこの内戦で息子を亡くしました」。

燃料支援は命綱

シリア国境に近く標高の高い山間部は、冬場は零下10度まで冷え込みます。公式なシリア難民キャンプがないレバノンでは、シリアからの難民の多くはバラックやテントといった劣悪な住環境で生活しています。そのため、冬場の凍てつく寒さの中、燃料を確保できるかどうかは、生命を左右する大きな問題です。パレスチナ人シリア難民の多くは、UNRWAからの支援や日雇いの仕事で稼いだわずか

な収入のほとんどが燃料費で消え、多くの世帯が借金を重ねて生活しています。また山間部で支援が入り難く、昨冬この地域で越冬支援を行ったのは、UNRWAと当会だけでした。シリアのヤルムークキャンプからワーベルキャンプの近くに避難してきたナワールさんは、「避難してきた頃は色々な団体から支援があった。でも今はUNRWAも他の団体もどんどん支援が減っている。昨日も近所の人たちと、今年の冬の燃料支援がどうなるのか心配して話していたのよ。ストーブなしでは冬はとても生活できない。これからも支援を続けてほしい」と話します。

レバノンではもうすぐ厳しい冬がやってきます。当会は2015年から毎年、約1,550世帯のパレスチナ人シリア難民世帯（貧困層の地元パレスチナ難民世帯を一部含む）に燃料を配布してきましたが、今年はまだ850世帯分の1週間分の燃料支援の準備しかできていません。状況は厳しくなる一方で、支援のニーズはますます高まっています。人々に寄り添った支援の継続にご協力をお願いします。

子どもたちの夏休み

7月から8月初めまで、提携団体「子どもの家」の各センターでは、夏休みイベントを実施しました。その中から、ブルジバラジネ難民キャンプでの清掃活動を報告します。

午前9時半に子どもたちが集合。この日は小1から小5までの補習クラスに通う子どもたちなど65人が参加し、まず全員で歌の合唱をしました。その後は、1年生、2～3年生、4～5年生の3つのグループに別れて活動。1年生のグループ23人は、キャンプ内の清掃をしました。

補習クラス指導員の説明の後、熱中症予防のための帽子とゴム手袋、ごみ袋を子どもたちに配布しました。白い帽子をかぶり、まるで遠足に出かけるような雰囲気で、子どもたちは大はしゃぎです。まずはセンターの近くにある慰霊碑を掃除しました。普段はほとんど人が立ち入らないため、葉っぱやたばこの吸殻、お菓子の袋などがたくさん落ちていました。ほうきを持ってごみを集める子、それをちり取りで受ける子、手でごみを集める子、全員で役割を分

担して作業しました。補習クラス指導員、ソーシャルワーカー、当会スタッフのほか、かつて補習クラスに通っていた10代のお兄さん・お姉さんもボランティアとして参加し、子どもたちが集めたごみを袋に詰めたり、子どもたちが清掃しにくい場所を手伝ったりしました。ごみをひと通り集めた後は、水を撒いて慰霊碑や周りのタイルなどを念入りに洗浄。泥だらけだったタイルはピカピカに。また周りの木々にも水をあげました。

環境をみんなで考える

その後は、センター周辺をごみ集めしながら一周しました。細い道を車やバイクが行き交うため、子どもたちの安全に注意しながらの作業です。道端にもたくさんたばこの吸い殻やお菓子の袋などが落ちていて、子どもたちは一つでも多くのごみを拾おうと必死です。住民の人たちが時折「ありがとう」と声をかけてくれました。合計1時間半くらいの作業でしたが、ごみ袋がいくつもいっぱいになるくらいたくさんのごみが集まりました。

センターに戻って、環境問題を考えるディスカッションをしました。「なぜキャンプの道にはごみが多いの？」「ごみを減らすにはどうしたいいの？」という指導員の問いかけに、子どもたちが思い思いの意見を述べました。「ポイ捨てはやめよう」「ごみはごみ箱に捨てよう」「地球にやさしくしなければいけない」といった身近に自分たちができる意見が子どもたちから出て、ポスターを作って教室に貼りました。

レバノンでは、子どもたちが学校やセンター、地域などを掃除することはほとんどありません。このイベントでは、日本の学校を見本にし、キャンプやセンターの教室やホールの掃除をしました。学校でも補習クラスの授業でも、教科書の内容を先生が教えるという一方通行の授業が多く、子どもたちが自分の意見を話し合う機会はほとんどありません。子どもたちはこうした活動を通して、さまざまなことを体験・経験をし、楽しみながら自分たちの身近にある問題を考えることができました。夏休み期間中は居場所がない子どもたちも多い中、イベントは子どもたちに居場所を提供したり、青少年にボランティア参加の機会を提供するという意味でも大きな役割を果たしています。

10代の子どもたちの支援も必要

当会では、2013年と2014年に、毎年秋に開かれる国際的なマラソン大会である「ベイルートマラソン」への子どもたちの参加を支援しました。この夏、2014年のマラソンに参加したザハラさん・イブラヒムくん姉弟を訪ねました。

一家はシリアのラッカ出身のシリア人。2011年にレバノンのブルジバラジネキャンプへ避難してきました。二人は両親と姉、姉の子どもの6人で避難生活を送っています。ラッカの自宅は無事でしたが、戦闘が今なお続き戻ることができません。

「シリアから避難してすぐの頃は多くの団体から支援がありましたが、今は国連機関（UNHCR）からの支援しかありません。生活は日々苦しくなる一方で、一日一日を生きていくのに必死です」とお母さん。「内戦が始まって、子どもたちは学校に行けなくなりました。夫は息子に家計を支えるため、学校には行かず働いてほしいと言いますが、私は子どもたちには教育を受けてほしいと思っています。ここに避難してきてから、色んな人に話を聞いて、子どもたちを「子どもの家」の補習クラスに参加させました。補習クラスに通ってから、子どもたちの成績は上がりました。また息子は物事の分別がつくようになりました」。

イブラヒム君は現在14歳。2014年から2017年まで補習クラスに参加していましたが、受け入れ年齢を超えたため、現在は子どもの家のボランティアとして、積極的に小さい子どもたちをサポートしています。将来の夢は、サッカー選手になること。

ザハラさんは現在17歳。4年前のベイルートマラソンのことをよく覚えています。「マラソン本番まで、キャンプの中や外の公園、海岸沿いで練習した。CCPのスタッフがどうやって走ったらいいか、呼吸したらいいか教えてくれた。本番は5時に家を出て、家族も応援に来てくれたの。大会の雰囲気は最高だった」と、当時着たTシャツや記念の写真を見せながら、思い出を語ってくれました。ザハラさんの将来の夢はジャーナリスト。シリアで起こっている戦争や、レバノンのパレスチナ難民キャンプの状況、人々が心の中に抱えているメッセージを伝えたいと言います。

シリア内戦から8年目。今後の展望は定かではなく、長期化する避難生活は厳しくなる一方です。しかし、困難な生活の中でも子どもたちは成長しています。これからも、教育や医療支援、心理社会的サポートを通して、子どもたちの将来の扉を開けていきたいと思います。